平成１９年９月１日発行

かまくし

第２５号

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

日体荏原高校　柔道部

日体荏原高校は、明治三十七年に、荏原郡大井村北浜川に、都内でただ一つの中学校として、日本体育会荏原中学校が創立されました。（創立百周年記念誌より）

大正二年の運動会には、皇太子殿下（昭和天皇）、淳宮殿下、高松宮殿下がおいでになっています。昭和十年、火災の為、全校舎が消失。蒲田区議会の要請で、安方町（現在地）に移転し、昭和二十三年、新制度により、高等学校に移行し、荏原高等学校になりました。平成十年には、女子の募集を開始し、共学校として、現在に至っています。平成十六年には、創立百周年記念式典が挙行されました。「向上一路、只維至誠、偕和協調」を創立以来の校訓としています。

今回は、最近めざましい活躍をしている柔道部をご紹介します。柔道部は、昭和三十五年に創立され、現在は、小久保先生の指導の下二十一名の部員が在籍しています。朝と放課後の練習は、もちろんの事、姉妹校である日体大へ行っての練習や、小久保先生の先輩で、オリンピック金メダリストの古賀稔彦氏を迎えての練習を行っています。年末年始は、学校内の合宿等「一念通天」（何事も一心を込めて念ずれば、天に通ずる）の精神で、日夜練習に励んでいます。その成果が実り、柔道の三大大会と言われている全国選手権、金鷲旗、インターハイに出場しています。平成十九年三月二十一日、日本武道館で開催された第二十九回全国選手権では、見事に第三位の成績を収めています。この選手権では、主将の村上祐二選手が、全国選手権優秀選手賞にも輝いています。八十一kg級でインターハイ出場が決まっている小林雅司選手は、全国選手権前、腰を痛めてしまい、治療を受けながらの苦しい戦いの中での第三位は、感慨深いものがあったのではと思われます。

監督の小久保先生は、社会人実業団で、十年間現役の選手、三年間は監督として、実業団の柔道部を支えてこられました。荏原高校の柔道部では、五年間指導されています。部員の内、八名は、熊本、山口、兵庫、神奈川の出身で、新蒲田三丁目の合宿所から毎日、自転車で通学しています。この合宿所は、小久保先生の住まいも兼ねており、部員の食事等は、先生の奥様、奥様のお母様、賄いの人の三人で切り盛りしています。体重増量、減量の部員それぞれに合わせて用意しているとの事です。

柔道部を家族で支えていらっしゃる先生、応援して下さっている多勢の方々、そして、自分達の為に、次は、ぜひ、優勝を勝ち取ってください。

（取材　髙橋委員）

特集『池上競馬場』

「人気馬・ゲンロク」

本紙愛読者の皆さんもご記憶の通り2006年12月に、当年の競馬会のフィナーレを飾る有馬記念で、ファンによる人気投票と実績で選ばれた実力馬（ディープインパクト）が師走のターフ（レース場）を駆け抜け、有終の美を飾りました。見事三冠を制し、競馬ファンならずとも、日本中が興奮の坩堝と化し、熱狂しました。

ちょうど百年前の明治39（1906）年11月に、日本の近代競馬の発祥地・大田区池上の「池上競馬場」でも、東京競馬会の第1回秋季競馬が開催され、名実ともに第1の名馬（ゲンロク）に絶大な人気が集中し、その熱狂ぶりは（ディープインパクト）に勝るとも決して劣ることはなかったのです。

池上は池上本門寺の門前町として古くから栄え、明治の後期まで、参詣客を対象にした茶店・酒店・旅籠・葛餅屋等の店が軒を連ね賑わいを見せていました。その門前町のやや南側（現在の大田区池上六～八丁目周辺）に、日本で初めて本格的な馬券付の競馬「池上競馬場」が建設されたのは、明治39（1906）年3月でした。地元門前町の商店から歓迎され、競馬ファンからも期待されて大盛況のスタートだったのですが、なぜか、わずか二年で閉鎖されてしまったのです。その裏には、日本競馬会の黎明期の混乱した世相が集約されていたのです。

「日本競馬の黎明期」

日本での競馬の起源は七世紀中ごろ天智天皇が、競べ馬（くらべうま）を見て、楽しまれたのが始まりとされています。当時は、神に奉納するための儀式的な祭事用競べ馬として、各地に普及していったと考えられています。

一方、現代競馬のルーツは、品種改良に三百年を誇るサラブレッドでおなじみのイギリスになります。貴族が自分の領地内で自分の馬に乗り、遊んでいるうちに競走を始めたのが、ヨーロッパに広がり、世界中に伝わったといわれています。いわば競馬の故郷といっても過言ではないでしょう。

そのヨーロッパ式の競馬を初めて日本に持ち込んだのが、安政5（1858）年、横浜の居留民の英米人たちでした。現在の横浜中華街付近に、小規模な蹄鉄形のコースを備え、国内法では賭博行為で禁止されていた馬券の発売を、治外法権を理由に公然と行い、楽しんでいたのです。

なおも、慶応3（1867）年、居留民は横浜根岸に観覧席の完備した、一周1774mの本格的な競馬施設「根岸競馬場」を建設し、近代競馬の醍醐味を満喫していました。しかし、一般日本人は入場すら出来ず、ただ羨望の眼差しで見ているだけでした。

明治に入ると、「日本人の手で競馬を」という機運が高まり、その根岸競馬を模倣し、東京九段に「招魂競馬」や「三田競馬」「戸山競馬」「不忍競馬」等、各地に個々の思惑で競馬場が乱立したのです。しかし、馬券の発売の禁止という刑法の壁で、運動会で我が子の徒競走を見るような、純粋な見るだけの競馬であり、一向に盛り上がらず沈滞気味でした。

ところが、それに転機をもたらしたのが、日清（1894年）・日露（1904年）戦争の影響でした。騎兵がまだ大きな役割を果たす実戦で、日本軍はコサック騎兵にしばしば苦戦を強いられていました。その原因は日本軍馬の能力と資質の劣悪さでした。

この二つの戦争の教訓から政府は、海外から優秀な種馬を輸入して、国産馬の改良に本腰を入れ始めたのです。その方策の一つとして、競馬を普及させる需要拡大策でした。それには競馬の人気を確保するための切り札となる、ファンからの要望の強かった馬券の導入でした。

「池上競馬場のデビュー」

明治38（1905）年12月、政府は馬券発売黙認の措置を講じ、それを受けて、馬の資質改良と組織の統一を目標に、東京競馬会が設立されました。そして東京府下荏原郡池上村に、天

皇ご観覧を想定のもとに設計し、13万5千円をかけ日本一の広壮雄大を誇る「池上競馬場」建設に着手しました。

当時はまだ池上線は敷設されておらず、蒲田からこのあたりは水田で、その田んぼを埋め立てて、周囲約6km、馬場の一周1800m、馬見所（パドック）500坪、厩舎は30坪という規模の造りでした。

明治39（1906）年11月、日本人の手による初の本格的な馬券付競馬の東京競馬会が、「池上競馬場」で第一回秋季競馬を開催しました。早朝より大森駅からの沿道には行列ができ、中には三人引きの人力車を利用する者もいて、多くのファンが殺到、スタンドも満員で大盛況を呈したということです。

正面（現在の池上駅南側付近）入り口を入ると、右手に500坪の馬見所があり、当日競う出走馬（ゲンロク）（コマチ）（カリュウ）等が馬丁に引かれて場内を巡り、中でも名実ともに圧倒的な人気馬（ゲンロク）に期待と思惑が集中し、その熱狂ぶりは紳士・淑女はもちろんのこと、庶民たちも熱いまなざしで熟視していました。

レースが跳ねた最寄の大森駅は興奮でいっぱいで、大勝利を宣言する人や、大敗を嘆く人、悲喜こもごもで、金持ちも庶民もそれなりに馬券付競馬を楽しんでいる様子がいきいきと伝わってきたということです。

このように初めての馬券付競馬は大成功で、「池上競馬場」の船出は順風満帆でした。

「わずか2年悲劇の競馬場」

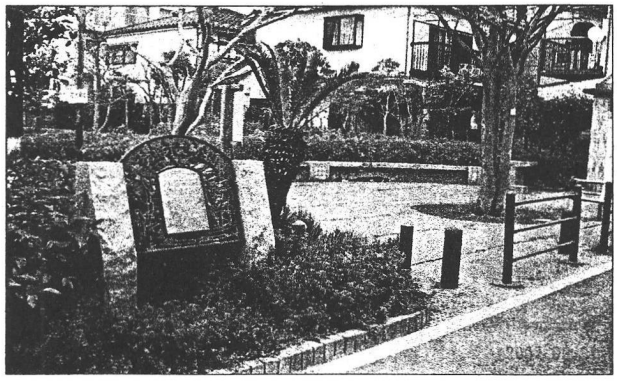
この「池上競馬場」の成功に続いて、全国各地の競馬場でも馬券の発売が始まり、わずかの間に庶民の楽しみとして、一気に普及していきました。

しかし、今まで抑圧されていた馬券の発売が一気に解禁されると、その反動で競馬熱は異常に高まりました。競馬そのものを楽しむのではなく、ギャンブラーとして各地の競馬場に押しかけ、庶民の手の届かない掛け金が飛び交うようになり、経済破綻者が続出したのです。また、競馬に絡む不正や詐欺行為が横行し、公序良俗に反する社会不安が発生、一部の国民より、射幸心を煽った政府への不満が噴出したのです。

もともとこの馬券発売は政府内部で議論が行われないまま黙許の形で始まったもので、司法局が正式に許可したものではなかったのです。いわゆる賭博行為と解釈する当局を中心に、競馬を社会悪とする非難の声が強まり、明治41（1908）年には、司法・立法・行政の各方面で論争に発展し、政治問題になりました。そして同年10月、ついに全面的な馬券発売禁止という事態に至ったのです。

日本一の規模と設備を誇り、庶民の絶大な人気を獲得した「池上競馬場」も、競走馬の悲鳴やファンの悲痛な叫び声は馬耳東風で、当局には届かず、馬券発売が禁止になりました。もはや見るだけの競馬には何の魅力もなく、急速に集客率が悪化し、結局活路を見出すことができず誕生からわずか2年で閉鎖を余儀なくされたのでした。

こうして競馬場や馬見所等の敷地は長らく放置され、草原や池になって付近の子供たちの格好の遊び場になっていましたが、昭和11（1936）年より、目蒲電鉄（東急）不動産部の手により分譲地として段階的に売りに出され、現在は、住宅街になっています。



特に往時を偲ぶものは見当たりませんが、唯一の名残は、池上6丁目30に、かって競走馬が駆け回ったターフの一部が、幼児たちの駆け回れる小ぢんまりとしたポニー「児童公園」になっています。（写真）

（取材　滝口委員）

投稿

追憶

西蒲田　村野善人

かまにし17第22号に黒沢タイプライター工場の話が記載されていましたが、私も幼少の頃多分4歳位の時であったと思っていますが、黒沢幼稚園に毎日通園していた頃を思い出しました。

私の現在の住まい斜め前、都税事務所を含む西蒲田7丁目11～12番、22～23番の部分が黒沢貞次郎氏の広大な敷地・屋敷のあったところで、敷地内には椎の木の大木が沢山あって、秋になると、よく椎の実を拾いに庭内に入り込んで、時には庭番のおじさんに怒鳴られて逃げ帰ったりしたものですが、椎の実は炒って食べると大変おいしいもので、当時菓子類が自由に買えない時代ですから、度々拾いに入ったことを覚えています。

又、かまにし17第23号には、矢口火力発電所のことがかなり詳細に書いてありますが、私の父親が大正11年頃までこの発電所で働いていました。父親は、軍艦鞍馬という艦の機関兵として乗っていましたが、退役後に矢口火力発電所に奉職していて、幼い私を度々発電所に連れて行ってくれましたが、今でも鮮明に焼きついて覚えているのは、工場内はドスンドスンという凄まじい轟音で話はまったく聞こえないほどでした。巨大な横置、水平のピストンが動いていて、父はこれをガスエンジンと呼んでいました。貴紙の記事に書いてあるタービンではないような気がしますが。横を通るときはほんとうに怖かった事を今でも記憶しています。

其の後、二つを退所する近くまで六郷村天五木にあった社宅と言っても木造平屋でしたが、家族6人で住んでいました。

いつもこのような記事には、ほのぼのとした郷愁を感じます。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，536人
	女	27，116人
	計	56，652人
世帯		30，026世帯

平成19年8月1日現在

「蒲田西地区　社会を明るくする運動」

社会を明るくする運動は、犯罪や非行のない明るい社会を築くことを目的とした今年で57回目を迎える全国的運動です。

大田区では、34機関・団体を構成機関として活動を行っています。

蒲田西地区でも毎年、車両パレードや蒲田駅西口でのPR活動などの地域活動を実施してきました。

特に今年は、7月の協調月間に向かい、各自治会・町会や学校・PTA・商店会などの参加による実施委員会を立ち上げ、地域全体でこの運動に取り組む体制づくりをしました。

また、今年の地区集会は、おなづか小学校のご協力をいただき5・6年生が総合学習で取り組んできた「地域の安心・安全まちづくりー安全マップをつくろうー」と連携し、6月27日の公開授業日におなづか小学校4・5・6年生とPTA・地域の方々の多くの参加を得て、同校体育館でパネルディスカッションを開催いたしました。

これからも青少年の健全育成を推進しながら、安全・安心の地域づくりのため、実施委員会を中心に活動を続けてまいりますので、地域の皆様方のご協力をお願いいたします。

中学生参加の清掃活動

「お詫びと訂正」

＊かまにし17第23号2ページ4段目「大六天社」の祠については、実地調査したところ現存していないことがわかりました。お詫びして訂正いたします。

＊かまにし17第24号2ページ1段目「鵜田新三郎」は「鴇田新三郎」の間違いでした。お詫びして訂正いたします。

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七ー十二ー七
（三七三二）四七八五